

Living the Lotus

5

2024

VOL. 224

Buddhism in Everyday Life



立正佼成会
シアトル支部



Living the Lotus Vol. 224 (May 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。



柔らかな人の、心は自由

庭野日鑑
立正佼成会会長



牛の軛（くびき）を離す

毎年この時季になると、田起こしや代掻きなど、田植えの準備を手伝った昔が懐かしく思い出されます。小学五、六年か中学一、二年生のころに、田んぼを耕す牛の鼻木を持って引く「鼻取り」をした記憶です。大きな体の牛に「フー」と荒い鼻息を吹きかけられて怖い思いもしましたが、その牛も私たちにとっては一つ屋根の下で暮らす大切な家族でした。新潟県の菅沼に開祖さまの生家を初めて訪ねた際、玄関を開けて薄暗い家に一步を踏み入れたときの、厩から漂うにおいが記憶のなかに鮮明に残っています。

そのように牛や馬と一体の生活を営む日々をすごした私にとって、釈尊のお言葉をまとめた「スッタニパータ」の「柔和は牛の軛を離すこと」という一節は、飼っていた牛馬との交流や、そこに生まれる思いやりの心に強く結びつく印象的なものです。田を耕す牛に装着した軛という装具を、農作業を終えて牛の体から外すときに萌すのは、牛に対する「きょうもよく働いてくれたなあ。ありがとう」という感謝といたわりの気持ちに違いありません。それが、「やさしくおだやかな様子」を意味する「柔和」の一語に凝縮され、家族の一員である牛を農夫が思いやるように、すべての人が「やさしくおだやかであれ」と願われた釈尊の思いもまた、この一節にこめられていると思うのです。

とらわれを離れれば

「軛を離す」ということをまた別の角度で見ると、私たち人間が、自分を縛りつけているものを外して生きることの大切さが象徴的に教えられています。

思惑やものごとへの執着など、心のとらわれが多い私たち人間は、動物や植

物のように何ものにもとらわれない自由自在な生き方ができません。そのとらわれによって苦悩も生まれるのですが、仏菩薩のような遊戯三昧の境地とまではいかななくても、心のとらわれを少しでも離れて、イライラの少ない、のびのびとしたおだやかな日々をすごしたいと、だれもが願っているはずです。

江戸時代の禅僧、至道無難禅師は、「何も思わないのが、仏の稽古」「何も思わないような態度で、何もかもするのがいい」といわれ、日ごろから何につけ、とらわれないことを心がけておられたようです。つぎのような話があります。

自分の住む村に庵まで結んで留め置くほど禅師を尊敬する裕福な老人がいたのですが、ある日、その人の娘が妊娠していることがわかります。相手はだれかと問い詰めると、娘は「和尚さまが……」と嘘をついたのです。老人は怒りのあまり、すぐに禅師のもとに駆けつけて罵詈雑言を浴びせたあげく、村から追いだします。ところが、ほどなくして娘が「咎められるのが怖くて、人から尊ばれる和尚さまが相手といえればいいかと思ひ」と真相を打ち明けたのです。

老人はあわてて禅師を訪ね、涙ながらに詫びます。すると禅師は、「にっことうち笑い、露ばかりも咎むるけしきなし」と文献に残されています。だれにもやさしくて慈悲深く、柔和にして、とらわれのない心の持ち主の一人は、間違いないこの至道無難禅師その人でありましょう。

ちなみに、「至道無難」とは、禅語の一つで「真実に至る道は何も難しいことではない」という意味です。ただ一つ、あれが好きとか嫌いとか、あれこれと自分の思いにとらわれなければそれでいい、それが仏道だということです。

開祖さまは柔和について、「はじめは形だけのニコニコ主義でもかまいません。しいて柔和を心がけていれば、自然とそれが精神に溶けこんでしまう」と述べていますから、仏のように柔和で自由な人になりたいと念じながら、ものごとをできる限りニコニコ顔で受けとめてまいりましょう。

(『佼成』2024年5月号)



Interview

5月号と7月号では、2024年3月に立正佼成会学林を卒業した2名の青年のインタビューをお届けします。学林は「実践的仏教」と「諸宗教対話・協力」のためのグローバルトレーニングセンターです。仏教、法華經に基づく全人教育を通して、実践的仏教の指導者をはじめ、国際宗教協力、平和構築などに従事する国内外のリーダーを養成しています。



学林ウェブサイト

国や民族、宗教の違いを乗り越え、 誰もが平和に暮らせる世界を

バングラデシュ教会 バルア・ムクタ

学林での2年間を振り返って、最も印象に残っていることを教えてください。

私にとっては、寮での共同生活を初めて経験したことがいちばんの思い出ですね。特に最初は言葉や文化などの壁があり、自分の気持ちを相手に伝えるのが難しく、ある時、同期の仲間との人間関係で悩んだことがありました。その人は当初、私が挨拶をしても返事をしてくれなかったり、私がいくら話しかけても耳を傾けることもなかったんです。

《なんであの人は、いつもあんな態度をとるのだろう?》と
思って、その同期との関係を当時の大友次長さんに相談すると「相手を変えようとするのではなく、自分が変わっていくことが大事ですよ」と教えてくださったのです。

その後、《自分がどう変わっていけばいいんだろう?》と
自問自答しながら、相手の言動がどうであろうとも、私のほうから積極的に声をかけたり、相手の立場になって聴く努力を続けました。すると少しずつですが、相手の表情や態度が穏やかになって、お互いにいろいろ本音を言い合える関係に変化していったのです。私はこの体験をとおして、「自分が変わることによって今の状況や関係は変わっていくんだ」ということを学ばせていただきました。



インタビューに答えるムクタさん

学林では仏教や法華經を研鑽されたと思いますが、いちばんの学びはなんですか?

法華經の提婆達多品にある「提婆達多が善知識」という一節が最も心の中に残っています。仏さまは自分の命を何度もねらおうとした提婆達多を恨むどころか、むしろ提婆達多のお陰ですます悟りを深めることができたと感謝されました。ですから私たちも、仏さまが提婆達多のことを善き友と受けとめたように徹底した礼拝行ができれば、どのような人に対しても差別や偏見ではなく、尊敬し尊重する見方になると信じています。



学林の仲間と共に特別講師を迎えて(学林講堂、前列右がムクタさん)

卒林研究発表会では『一乗精神を実践する～地元市民とロヒンギャ難民との平和的共存』というテーマで発表をされましたが、このテーマを選んだ理由を教えてください。

私はバングラデシュのcocksbazar地域に住む仏教徒の家庭に生まれ育ちました。私が19歳の頃から、新聞やテレビなどでイスラム教徒の少数民族であるロヒンギャ難民について報道され、家族や周囲の間にロヒンギャ難民を受け入れることに不安が広がっていきました。当時の私は、ミャンマーは仏教国であるから悪い行為をするはずはなく、問題はロヒンギャのほうにあり、それと同時に周囲の批判的な態度も手伝って、ロヒンギャ難民に対して排他的な考えを持つようになったのです。

しかし学林に入り、自分の考え方に疑問を抱き始めました。先ほどの法華経の提婆達多品や諸宗教対話を学ぶなかで、私はロヒンギャ難民を批判するだけで果たして仏教徒と言えるだろうかという思いから、ロヒンギャ難民とcocksbazarの市民が共存して生きる道を探りたいと考え、このテーマを選びました。

帰国後は、このテーマをどのように具体化し、行動に移す予定ですか？

2017年の夏に仏教徒が90パーセントを占めるミャンマーで、イスラム教徒のロヒンギャの人たちが激しい武力弾圧と迫害に遭い、バングラデシュに避難して6年以上が経過しています。今、バングラデシュ国内には約97万人の難民の人たちがいますが、そのうち私が住んでいるcocksbazarには約93万人の人たちがキャンプ生活を送っています。しかも、その半数以上が女性や子どもたちなのです。現在、国連機関やNGO（非政府機関）の人たちがロヒンギャ難民の人道支援活動を続けていますが、私個人としてはお陰さまで日本語が話せますので、まずはできることから行動を起こしたいという気持ちから日本のNGOに入って難民キャ



布教実習先の福井教会で会員の皆さんに囲まれて



入寮の日に学林の仲間と(前列右から二番目がムクタさん)

ンプで支援活動に従事したいと思っています。

また、バングラデシュ教会のcocksbazar支部の青年たちと一緒に難民キャンプ周辺の清掃のボランティア活動を行ったり、ロヒンギャ難民に対する地元市民の関心を深め、同時に宗教的な壁を乗り越える目的で仏教徒とイスラム教徒の対話・交流の場を設けることも考えています。

法華経には、すべての人は仏さまと同じように尊い存在であり、お互いを認め合い、支え合う「一乗の精神」が説かれています。そのためにもロヒンギャ難民とcocksbazarの人たちがお互いに話し合うことで理解し合い、お互いの心を開くことによって達成される継続的な根気強い活動が必要で、国や民族、宗教の違いを乗り越えて、誰もが平和に暮らせる世界を目指していきたいと思っています。

最後に将来の夢を聞かせてください。

以前の私は卒林後の希望として立正佼成会に奉職したいという考えはあまりありませんでした。でも、布教実習で福井教会を訪れ、日々信者さんたちの布教活動や奉仕されるお姿を目の当たりにするなかで、「自分は開祖さまや会長先生に対する恩返しとして何ができるんだろう」という思いが次第に強くなっていったんです。バングラデシュに帰国後は、学林で学んだことを仕事や教会活動で生かして実践する、文化や宗教についてもっと深く学ぶために海外留学をするなどの選択肢はいろいろと考えられます。

しかし、よくよく考えてみると、私が今いちばん願っていることは超難関と言われる日本語能力試験の1級にチャレンジして合格を目指すということです。それは本当に厳しく困難な道のりだと思いますが、私は決して諦めません。帰国後は、とにかく必死になって私自身の日本語能力を高めるために勉強して、できることなら立正佼成会に奉職してさらに深く教えを学び、将来は国際伝道や国際宗教協力のためにお役に立ちたいと思っています。

まんが立正佼成会入門

会員になったら

立正佼成会のご本尊さま

立正佼成会のご本尊さまは、「久遠実成大恩教主 釈迦牟尼世尊」（久遠本仏）です。久遠本仏は遠い昔からこの世にいて、多くの人にそれぞれふさわしい方法で法を説いてくださっていると、法華経に記されています。開祖さまはこの一節にもとづいて、

久遠本仏をご本尊さまとしました。また、立正佼成会のご本尊さまが立像なのは、すべての人を救う活動的なすがたを表現しているのです。

ご本尊さまの内部には、開祖さまが全力を注いで書き写した法華経が納められています。



● 豆知識

ご本尊の光背（後光をかたどった装飾）には、多宝如来と四体の菩薩像が配置されている。中央上が多宝如来、向かって右上が上行菩薩、右下が無辺行菩薩、左上が浄行菩薩、左下が安立行菩薩だ。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

朝夕のご供養

ご供養（読経供養）は朝夕の二回行ないます。おたすきをかけ、経典とお数珠をもってご宝前の前に座ります。毎日、しっかり行なうと、とてもすがすがしい気持ちになります。

読経の前には、水やお茶、ご飯のお給仕をして、花びんの水を取りかえましょう。ローソクに火を灯

し、線香をあげるときは、火をつかうので気をつけて。

これで準備が整いました。朝は、その日一日の誓願を立て、夕方には感謝の心を込めてお経をあげましょう。





お役のある人

人さまを仏道に導く菩薩行

立正佼成会開祖 庭野日敬



本来、「お役」というものは、人間としてこの世に生まれたかぎり、どんな境遇にあり、どんな仕事についていようと、だれでもりっぱにもっているのです。いや、人間だけではありません。生きとし生けるものすべて、さらには空気や水、土といった無生物でさえ、もっているのです。

たとえば、ミミズは釣りの餌ぐらいにしか役立たないと思う人が多いでしょうが、とんでもない。ミミズは絶えず孔の前方の土を呑みこんで後方へ排出して、常に土を耕しているのです。また、その孔が通気を助け、ミミズが食べた土は肥料となって植物の生育に役立ちます。

ミミズよりさらに小さな土の中の微生物も、じつに大きな働きをしています。小さじ一杯の土に、なんと数億個の微生物がいるそうですが、これらの微生物は落ち葉や動植物の死骸を分解して、土に返す働きをもっています。もし、その働きがなかったら、地球上は動植物の死骸でおおわれて、私たちの住む場もなくなるというのです。

肉眼では見えない微生物でさえ、こうして他のためにりっぱにお役に立っているのです。

ましてや人間と生まれたからには、もし世のため、人のために「お役」を果たそうとしなければ、虫けらにも劣ることになるでしょう。

人間には、ほかの生物と違って一つすぐれたところがあります。それは、意識して他のために尽くせることです。ほかの生物は、自分のための働きが自然に他のためになっているのですが、人間だけは意識して他のために働けます。自分の仕事に精を出すような自然な役割だけでなく、積極的に他の利益のために働くことができるのです。

たとえば、ボランティア活動もその一つです。そして、最も価値ある活動が、人さまを仏道に導く菩薩行であることは、いうまでもありません。それが、仏さまが世に出られた「一大事の因縁」に沿いたてまつる働きであることは、最初にお話ししたとおりです。

庭野日敬平成法話集 1 『菩提の萌を発さしむ』, P.50-51

安樂行品から学ぶ柔和忍辱のこころ

国際伝道部長
赤川 恵一

みなさん、こんにちは。新緑の5月となりました。日本では5月の初めに大型連休があり、多くの人々の心が浮き立つ時期ですが、観光地や高速道路が混雑して予期せぬ混乱に出くわすことも稀ではありません。

会長先生は、そのような事態を想定されたのか、「柔和な人の、心は自由」と題する今月のご法話で、どのような心の持ちようで行ないを心がけたら良いかご指導くださいました。

まず「柔和な人」と聞いて私の心に浮かんだのは、『法華三部経』の「安樂行品第十四」の一節「忍辱の地に住し、柔和善順にして卒暴ならず」でした。会長先生が大学院の修士論文のテーマに選ばれたほど、「安樂行品第十四」は学びの深い品です。まるで生活実用書のように、生活に根差した智慧があふれています。「辛抱強く、優しく振舞うんですよ」というお釈迦さまの穏やかなお声が聞こえてきそうです。

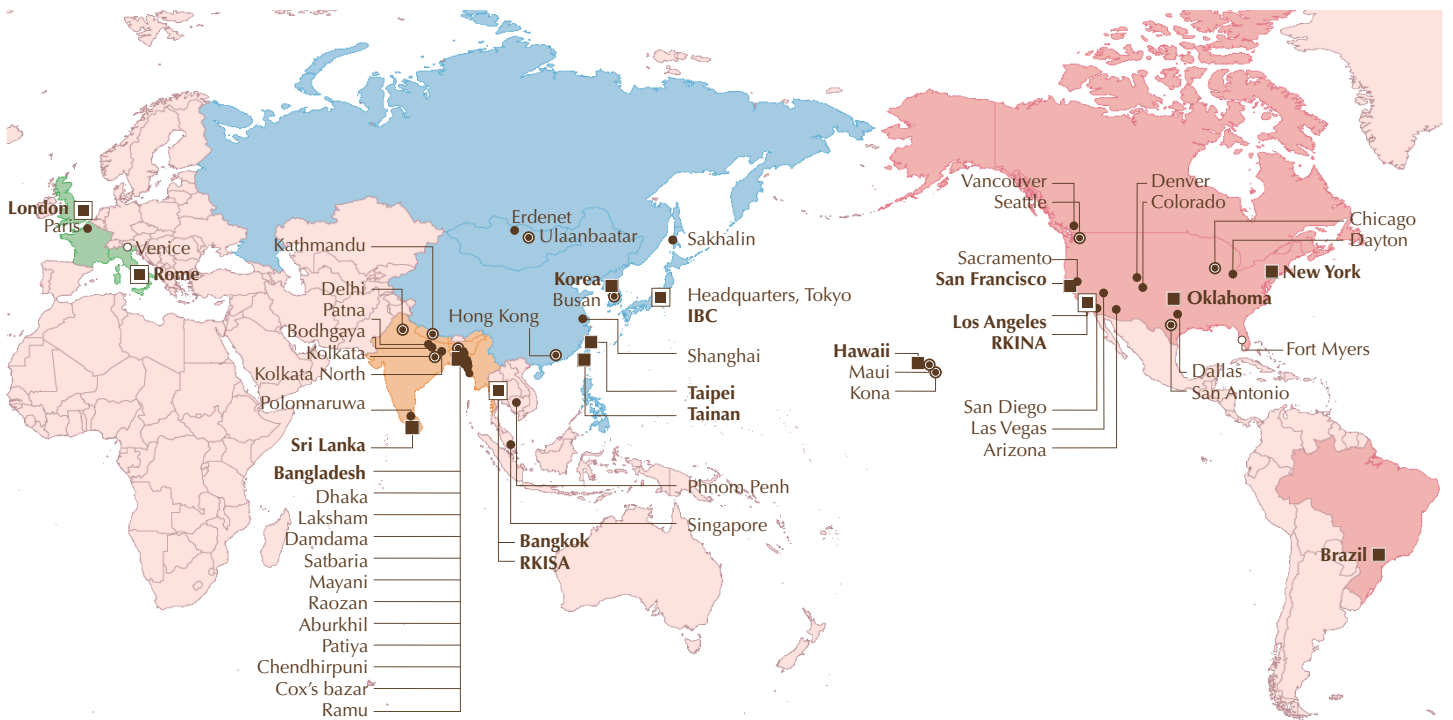
今年の連休は、この安樂行品の一節を胸に、自由自在の心境を楽しめるように精進したいと思います。



2024年3月22日と23日の二日間、ロサンゼルス教会で開催された北米の教会長および法人理事の会議に参加した赤川部長（前列中央）



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about
local Dharma centers

facebook

twitter

